

般若心経を補強する

救われについて

Ver. 4

空不動

2015/10/07 更新

○想定する視聴対象者は既に『暗号は解読された／般若心経』を読まれた方か、或いはYOU TUBEの「著者のセミナー」、又は『現代へのメッセージ／般若心経』を視聴した方々です。

### ●宗教に於ける、救われの方法として般若心経を読み直してみる。

般若心経では、緻密な論理の中に普遍的な世界観と、悟りに至るための方法が明確に説かれています。

しかしながら、般若心経を解読した著者としては、どうしても説明不足になる面が出てくるので、それを、「救われ」の方向から新たに説くことで、不足の部分を追加し、般若心経を補強したいと思っています。

般若心経は宗教と言うよりも、人類普遍の真理と言えるものです。しかしながら、多くの人は宗教として道を探求するので、宗教における「救われ」について説くことは十分な意味があると、著者は考えています。

般若心経は空の思想が中心に説かれていますが、いつの時代からか「空は実体が無い」と説明されています。しかしながら、般若心経を正しく読み解けば般若心経の中の、どこを探しても「実体が無い空」というものは一切見つかりません。

即ち、空とは「超実体」であり、五蘊皆空として、これから世界が調和するのではなく、既に調和した姿が有ると、説かれています。

そして人間は本来「空」であり、空の住人ですから、いつでも空に帰還できるし、この世界に戻ってこれると説かれています。

つまり、「空」に帰還することが悟りと言えるでしょう。これが般若心経の基本です。

ですから、人間が本来「超実体の空」そのものであるという真実が無ければ、「悟り」という概念そのものが、まさに「実体が無い」と言えるのです。

著者が特に強調したいことは、悟りは決して「何かをすれば悟れる」という、交換条件ではなく、「行」の実践技術でもない、という真実です。そこで、著者としてはこの真実を最も重要なこととして、追加して書いておかなければならないと思っています。

そこで、「悟り」と「救われ」は、基本的に意味が重複する概念なのですが、ここでは般若心経を補強する目的で、「救われ」という方向から、この真実を説いておきたいと考え、それをここに纏めておきます。

今回は「救われ」を、世界中の宗教に関連させて、宗教の立場に立ち、しかも宗教宗派に関係なく、それを超越して普遍的に説き起こしたいと思いますので、ここでは現代用語を多用することになります。

### ●信仰における、本来の動機とはなにか。

現世利益を求めて、目先の損得で宗教に入る人も居ます。

もちろんそれは一概に悪いことだとは言えません。それはそれで入り口としては許されていることです。

また、運命的な困難に直面して、その苦しみを解決して欲しいという動機で宗教に入る人も居ます。これもまた、本質ではありませんが、入り口としては許されることです。

そして、入り口から少しだけ中に入ってから、その宗教独自の価値基準が見えてきて、日常の出

来事に対する受け取り方を学ぶことで、確かに所謂運命的な困難による苦しみは激減することになりますが、それを救われと勘違いする人も出てきてしまいます。

さらに自分なりに善悪の評価が出来るようになって、それで他人や社会を批判するようになってしまい、これをも悟りと誤解してしまう人もいます。特に、そこに説かれる理想の姿に自らを強引に当てはめようとして、屁理屈を並べて自己正当化しようとする人も出てきてしまいます。又特殊能力が付いて、それを通して見える世界が全てと思い込む危険もあります。自分や自分達を中心とした遠近法で見える世界に普遍性はありません。

入り口は何でも許されるとして、入り口から少し中に入った後には、このような困った問題も出てきて、信仰を支える動機は様々に変化していきます。

そこで、信仰を最後まで支え、真の救われにつながる「普遍的な動機」とは、いったい何でしょうか。これが今回のテーマとなります。

そしてそれを一言で言うならば、道を究めるほどに自らの不完全さが見えてきて、その事に、強い「苦しみ」の自覚を持つに至り、それが信仰を保つ最終の動機となって、「苦しみ」から開放されることにより、救われに至るのだ、と言えます。

ここで言うところの「苦しみ」とは、一般に言うような「運命的な困難による苦しみとは全く次元が違います。

般若心経は 初期仏教の経典 十二縁起や四諦を完全否定しています。その意味は「超実体の空」を説かない初期仏教の世界では「苦」を解決できないということであり、つまり救われないと説いているのです。

そこで「救われ」に直接関係する「苦しみ」を、十二縁起や四諦で扱うような「苦」と明確に区別するために、ここでは片側カッコ付きで、「苦しみ」と表現します。

そこでまず、「苦しみ」について理解を深めて頂けるように詳しく説明をします。これが理解出来なければ何事も始まりません。

これは「救われに必要な苦しみ」であり、それゆえにこれを自覚することを私は「正しい苦しみの自覚」と呼んでいます。

つまり、「苦しみ」があるから、それから開放されたいと願うのであり、その自覚が無ければ、誰も開放されたいとは願わないのです。つまり、救われを願わないのです。願わなければ、救われたい、と言うことになります。

### ●般若心経から「苦しみ」を考える。

人間に、「苦しみ」が存在すると言う事実が、人間の本来の姿が「空」であることの傍証なのです。「空」に帰還しようとする原動力がこの「苦しみ」なのです。この原動力によって、人は「空」に戻ることが出来るのです。

人間の本来の姿が「空」だからこそ、「空」の立場から、「苦しみ」が生まれ、そして「正しい苦しみの自覚」が生まれてくるわけです。ですから、これは必要な「苦しみ」なのです。

この「苦しみ」を、般若心経の説く「宇宙の構造」から説明すれば、以下のようになります。

空から分かれた生命体である「色」が、肉の身を持つことで、生命活動を営むことができますが、一方(肉体に由来する精神作用)としての「空外の受想行識」と(霊体に由来する精神作用)としての「空中の受想行識」とのギャップが発生し、このギャップが、「色」から見ると「苦しみ」と感じるわけです。

ここで所謂苦しみは肉体の色が感じ取る苦しみであり、「苦しみ」は霊体の色を感じ取る「苦しみ」であると位置づけ出来ます。

一方所謂苦しみに関しては、般若心経では、無無明…無老死尽、として十二縁起を否定し、さらに、無苦集滅道として四諦を全面否定していますが、この否定の理由は、これが霊体の色を感じ取る苦しみ》では無いからなのだ、と見えてきます。

そしてさらにこの霊体の色を感じ取る苦しみ》こそ、再び空に帰還する方向を示していて、人はこのギャップを埋めようと努力して、最終的に「救われ」に至るのです。

ですから、このギャップこそ「空」への帰還の原動力となるために必要な苦しみ》であると言えます。今日はこのギャップに焦点を当てて、突っ込んだ話をしたいと思っています。

従って、信仰の真の動機としての、苦しみ》からの解放を求める気持ちは、これは「空」への帰還を求めて渴望する、魂の叫びと言えるものです。

つまり、ここでいう苦しみ》とは、般若心経の前半の度一切苦厄の「苦厄」ではなく、後半の心無罣礙の「罣礙」に相当します。能除一切苦の「苦」も一部含まれると思われます。

「罣礙」とは、これまでの所謂苦しみとは全く次元の違う苦しみ》であることに、特に注目してください。

そして「正しい苦しみの自覚」があれば、初期仏教の経典、十二縁起や四諦でいうところの肉体の色を感じ取る苦しみと般若心経が説く霊体の色を感じ取る苦しみ》との関係も次第に見えてきます。

しかし、その関係は複雑で、それを解析することは学問の対象には成っても、「救われ」には直接関係しないので、ここではその関係についてまでは論じないことにします。こまかい分析に入り込むと、たちまち横道にそれてしまいますから、せいぜい、それぞれは無関係ではないという程度に理解しておけば、それで十分でしょう。

### ●苦しみ》を正しく知れば、「正しい苦しみの自覚」に至り、そして「真の救われ」に至る。

「救われ」を求めない段階の人には、苦しみ》は、全く見えていないのですが、次第に自らの生き方を模索するようになり、何らかの修行の過程で、次第に見えてくる自らの不完全な姿に気づきだし、道を究めるほどに、自己の内面の自由性を損なう障害が目立って見えてくるようになります。

そしてやがて、その事が自らに重くのしかかり、自らがとても、救われ》がたい存在であることに、気づいていくのです。

自らの内面の苦しみ》の重圧が十分に感じ取れるようになったときに、はじめて救われ》への強い欲求が生まれるのです。

苦しみ》とは、それは自分のことであると同時に、全く自覚は無いものの、まさにそれは衆生の苦しむ姿であることにも気づいていくわけです。

ですから、「真の動機」は、自分自身の救われ》から、やがて、衆生の救われ》に、拡張していきます。

しかしながら、それだけでは個の拡張として、衆生を構成する個々人の救われ》を意味するのみですが、これのみで完結することはあり得ません。特に現代に於いては、「正しい苦しみの自覚」によって、「全体としての救われ》というものが、重要な意味を持ちます。それはつまり、世界の恒久平和を求めることを意味します。

そして、ここで重要になることは、世界の全ての宗教が、この世界の恒久平和》に対応していかなければ成りません。そのためには、独善という呪縛に気づき、そこに「正しい苦しみの自覚」を持ち、自ら積極的に変化することが求められています。《宇宙の理念》から、それが求められるのです。

さあ、このことを、般若心経の立場から、もっと詳しく話してみましよう。

## ●普遍的に説けば…。宗教の本質から考える。

まず、様々な宗教とその宗派にも依らない、普遍的な宗教の本質とは何だと思えますか？。

《宇宙の理念》という、根本からこれを示しましょう。

それは一言で言うなら、自己の内面の自由性を追求して、《宇宙の理念》にまで達することにあると言えるでしょう。そしてさらには、その過程に位置する、人類全体としての内面の自由性の確保です。これが世界の恒久平和につながる、唯一の道です。

そのためには、まず自己の内面の自由性を縛っている荷物という「罣礙」に気づき、そこに「苦しみ」を発見し、そこに「正しい苦しみの自覚」を持ち、帰還する方向を定め、守護の神靈の導きを受けて、「苦しみ」を解放することです。それが空への帰還であり、悟りと同じ意味になります。

その解放の手段として、幾つかの手法があり、それが世界の全ての宗教の根幹を形成しているのです。

この「苦しみ」の解決に、ほんの少しでも近づくにつれて、その結果として、守護の神靈に導かれて天命成就に導かれるし、現世利益もあるし、大きな運命の好転もあるのです。しかし、この運命の好転がそのまま「救われ」を意味するものではありません。それはあくまで、「救われ」へのプロセスなのです。

しかし、広い意味では、この「救われ」へのプロセスに乗った段階で、「救われ」は約束されたという意味で、「救われた」という事も可能です。これは広義の「救われ」と呼称します。そして、ここでは特に広義ではなく、狭義の「救われ」について話を展開しています。

正直で素直な心の持ち主であれば、直ぐに「ギャップ」に詰まっている障害に気づき、内面の自由性を求め、その障害となるものに「苦しみ」を感じ取り、その上で「正しい苦しみの自覚」に至ります。

そして徹底して自らの持つ人間の「内面の自由性の障害」と戦います。

そこに先人が示した様々な宗教が有り、「救われ」の道が用意されていることに気づくわけですが。

この流れは「正しい苦しみの自覚」を持った人にとって、初めて十分な意味を持つのです。

つまり、自らの不完全な姿を見極め、そこに「正しい苦しみの自覚」を持つと言うことが、「救われ」のための条件となります。

もし、「正しい苦しみの自覚」を持たなければ、「救われ」は実現しません。

ですから、「救われるためには、自らが救われていないことを心底知らなければなりません。

そのためには、自らの努力で、「救われの条件」を満たさなければなりません。

繰り返しになりますが、現代に於いては、個の「救われ」だけでなく、宗教自身がこれからの時代に適応していくために、自らの抱える、独善という、呪縛を解放しなければなりません。そのためには、宗教自身が「正しい苦しみの自覚」を持つことを求められます。

現代に於いては、道を深めずして、…自らを極めずして、…自らの不完全さに何度も直面せずして、…自らの宗教の独善を放置したままで…、つまり、宗教の独善に「正しい苦しみの自覚」を持たずして、個の「救われ」すら存在しません。

つまり、この「救われの条件」が満たされないままでは、「救われ」は実現しないのです。

般若心経では、そこに示された行により、「空」に達して普遍性を確立し、そこから現実に働きかけることで、はじめて「救われ」を得たと言えます。

救われを成就するために、その前段階としての「救われの条件」を詳しく説く必要があります。

つまり、「救われの条件」を満たすための修行が必要であるということです。

「自己の内面の自由性を抑圧する障害」に気づき、それを発見し、それに対して、正しく「苦しみ」を感じ取り、そこに「正しい苦しみの自覚」を持つための修行が必要であるということなのです。

## ●ならばあなたにとって「苦しみ」とは何か。

ここから述べることから、あなたは何を発見しますか？。

そして拒否せずに、どこまで自分のこととして捉えられますか？。

よくよく心を澄ませて、背伸びをせずに、裸の気持ちで聴いて下さい。

私の言う「苦しみ」とは、所謂運命的な困難による苦しみのことではありません。

運命的な困難しか苦しみと感ぜない人は「正しい苦しみの自覚」には至っていないのです。

自らの運命的な困難さからくる苦しみからの開放のみを宗教と勘違いすると、その宗教の独善を肯定し、やがて迷いの道にそれてしまいます。宗教の独善もそのまま放置されます。

宗教の中では、しばしば運命的苦しみに注目しますが、ここではそれは本質ではないと言っているのです。

ここで言うところの「正しい苦しみの自覚」とは内面的な精神性の問題であり、自らの自由性を損なうことの苦しみを自覚することを言います。

ここでもし、内面の自由性を求める前に、外側の自由性を求めようとすると、たちまち自由と自由が戦う構図と成ります。これはもう既に自由ではなく、混乱です。

ですから、求めるべきは先ず何よりも、内面の自由性なのです。そしてその内面の自由性を具体的に表現したものが外側の自由性でなければ成りません。

やがて人は、自己の内面の自由性を抑圧する重荷を正しく自覚して、それを取り除き、自らの心の姿勢を整えることへと導かれ、内面の自由性を確立するまでになります。

般若心経の中に出てくる「無意識界」の行を実践すると、次第に自分の内面が見えてきます。

この行を深めて行くと、自己の内面の心の姿勢が分かるように成り、内面の自由性に対する感度が高くなり、自由性に対する障害が見えてきます。

自由性に対する感度が高まってくると、そこに「苦しみ」があると感じ取れるわけです。

「苦しみ」を生み出す自由性の障害は、誰の中にも存在していて、言ってみればその障害とは自分の中の「嘘」というものでしょう。

しかしこれも単なる嘘ではありません。普通は誰もそれを嘘とは思わない嘘ですが、自分の内面の自由性の「感度」が高まれば、それは嘘としてキャッチできるのです。それが自分の内面の自由性の障害となっていることから、それは「苦しみ」としてキャッチできるのです。

それが分かってくると、あらゆる人間の内面の自由性は大きく抑圧されていて、衆生は皆、その自覚の無いまま、「苦しみ」の中にのたうち回り、もがいていると見えてくるのです。

この嘘については、他の著書『人間やりなおし』で詳しく書いているので、それを読んでいただくとして、ここでは多少切り口を変えて示しましょう。

心の姿勢に自由性の障害となる嘘があれば、それは湧き出す想念として、より具現化した姿として現れてきます。これなら、心の姿勢の嘘よりも気づきやすい筈です。

そして「無意識界」の行により、心の姿勢を観察出来るようになれば、やがて「自分は想念という自分以外のものに翻弄されている」と気づきはじめて来ます。

今回は心の姿勢の嘘が、次の段階にまで具現化された「想念」と言う切り口でお話ししましょう。

想念が見えてくると、人間という存在は、自分以外の、いかにも自分のようなふりをして出てくる想念という霧みたいな物に、真の自分が隠されてしまい、その霧みたいなものに支配されて、その奴隷になっていることが分かるのです。

この時、自分は想念の奴隷であったと気づくことで、そこに初めて「正しい苦しみの自覚」が生まれます。

しかし、多くの人は想念を自分自身と誤っていますから、切り離しようがないのです。ですから、想念の奴隷状態にあることを知る人は、きわめて少ないのです。

殆どの人は「呪縛された想念の命ずるままに行動することが、自分の自由だ」と勘違いしているのですね。

このことで、内面の自由性が大きく犠牲になっていることを知る人は少ないのです。

しかも、このことに「正しい苦しみの自覚」を感じ取っている人はさらに少ないのです。

そして、この「苦しみの自覚」を正しく自覚して、それを何とか解消しようと努力している人はもっとも少ないのです。

## ●想念の切り離し作業。先ず「くさび」を打ち込む。

「救われの条件」を満たした先人達は「正しい苦しみの自覚」を持ち、それを解消しようとして、想念の呪縛と戦ったわけです。そして、遂にその解決法を見つけ出したのです。

その最後の局面において、世界の様々な宗教は、それぞれの方法で、その解決の道を用意しているのです。もし、それがどのような形であれ、それが示されていないとすれば、それは宗教とは言えません。

そこで、それを一般化して示しましょう。

本来の宗教であれば、そこに共通して言えることがあります。

先ずこの想念の呪縛に「正しい苦しみの自覚」を持つことで、自分と想念の間に「くさび」を打ち込みます。「正しい苦しみの自覚」を持つことが、「くさび」を打ち込むことを意味します。その次に想念の切り離しのための切り離し作業に入ります。ここでは、「くさび」を打ち込んだが、いまだ切り離れてはいない、その想念を持ったまま、フラクタル共鳴の中に飛び込みます。

ところで、このフラクタル共鳴を発生させるには、その宗教に必ずある「広義の祈り」によるのです。「広義の祈り」をここでは「祈り」と呼称することにします。

般若心経ではそれを「呪」と言ったり、「真言」と言っています。そしてそのフラクタル共鳴を発生させることを般若波羅密多とっています。

本来ならば、如何なる宗教の「祈り」も、現代において、フラクタル共鳴を発していなければ成りません。そして、そのためにはその「祈り」が、普遍性を持っていることが絶対条件となります。

それは独善を破棄したことによって回復する普遍性のことです。つまり、如何なる宗教も時代の流れの中で、現代から未来に適応するために、自らが抱える独善の呪縛を破棄し、普遍性を回復して、

本来の姿を回復しなければならないのです。

ここで、もし**独善性**を持っている価値体系による解釈や、そのような祈りであれば、それは**フラクタル共鳴**を発する祈りではありません。却って**独善性**を強めます。

これは「現代において…」と言うところが重要ですね。過去には**独善**も差ほど問題にならなかったとしても、現代だからそれが重大問題になるのですね。

この件は後に詳しく示します。

ですから、あなたは、この**想念の呪縛**に「**正しい苦しみの自覚**」を持つことまでを自分の努力として行を実践すれば良いのです。その後は本来の姿を回復した宗教の中の、「**祈り**」という**フラクタル共鳴**の中で、処理して頂けるわけです。

ですからあなたは、その局面にいたるまでは、「**正しい苦しみの自覚**」を持ちつつ、この**想念**の支配から自由になろうとして、**想念の呪縛**からの開放を目指して、**想念**を自分から切り離す努力をするべきです。先ず、「**くさび**」を入れるところまでを自分の努力として為すべきなのです。その努力により、「**想念の呪縛**から解放されたい」という、あなたの意思が確認されて、その後に切り離しが行われることになっていくのです。**救われ**の第一歩として、この確認作業はとても重要なのです。

その背後には逐一、**守護の神霊**の導きがあることを決して忘れないように、いつもいつも**守護の神霊**への感謝を続けましょう。

そして、自分を支配して離さない、強烈な**想念の呪縛**に対しては躊躇せずに、徹底的に戦うことを一度は体験すべきです。

実は、あなたは人生の様々な場面で、常に「**正しい苦しみの自覚**」を求められているのです。

それでも、「**正しい苦しみの自覚**」を持つことなく、**想念**に支配された自分に気づくことがないのであれば、あなたは今、長い長い、迷路のトンネルを、右往左往している最中ということになります。

「**正しい苦しみの自覚**」を持てない段階は、**救われ**の入り口にも立っていないのであり、まだまだ「**救われの条件**」が整っていないのです。つまり、**救われ**ていないのです。

**救われた**人から衆生を見れば、そのすべてが**想念**の奴隷状況にあり、内面の自由が抑圧され、まさに**苦しみ**の渦中に居ると見えるのです。

●《**宇宙の理念**》を具現化した《**宇宙の方針**》として、**救われ**は既に用意されている。

般若心経的に言えば、《**宇宙の理念**》の中に、「**正しい苦しみの自覚**」に至った人に対しての**救われ**の道は、はじめから用意されているのです。それは宇宙の基本的な方針です。それは様々な人格神として、各宗教で語られています。

それは、「**空**」から分かれた「**救いの方針**」を人格化した表現なのです。

そしてそれは阿弥陀様でも良いし、観音様でも良いし、イエス様でも良いし、**守護の神霊**でも良いし、単に神様でも良いのですよ。

それは《**宇宙の理念**》から導かれることであり、人間は最終的に**救われる**ことになっているのです。



それは宇宙の設計思想として、はじめから人間は「空」に帰還できるようになっているという意味なのです。

だからといって、もし「人間は必ず救われると決まっているのだから、既に救われている立場から、もう何もなくて良いのだ」と説く人が居たとすれば、それはチョット早すぎるのですね。

原理的には、死後の世界まで含めれば、誰もが救われるはずですが、しかし、この百年足らずの短い人生の中で救われるためには、与えられた全ての課題を、一つ一つこなしていかなければならないのであり、現実には極限られた人しかそれに成功しないのです。

もし、この「救われの条件」を省略してしまうと、大変危険です。

### ●いつでもどこでも、自らの「心の姿勢」に立ち返ることを習慣づける。

これは私の修行体験からの忠告です。

これは自らの心の姿勢に立ち返り、そこから捉える苦しみ》の処理の問題なのです。そのためには、いつでも自己の内面の心の姿勢に戻って、内観できる習慣を徹底して学ぶ必要があります。

これが先に述べた般若心経の説く「無意識界」の行であり、般若波羅密多の行の一部なのです。

そして、このプロセスは、救われにとって、どうしても必要なプロセスなのです。

そして、このプロセス無しに、悟りも救われもあり得ません。

### ●「救われの条件」である「正しい苦しみの自覚」について、さらに説明を続けます。

たとえば、わかりやすい例として、人を恨むことや、人を裁くことが想念の呪縛と気付けば、同時にそれが自分の苦しみ》であると気付きます。そしてそれに気付けば、誰もがその恨みや裁きの想念の支配から開放されたいと願う筈です。

しかし、想念の呪縛の中に居れば、それが呪縛とは決して気づきません。だからこそ呪縛なのです。

そこに苦しみがあっても、それが自分ではなく、相手の問題とってる内は、呪縛は続いているのであり、この問題は解決しません。

ここで「人を恨むことや、自分の価値観で人を裁くことが悪いことだから、やめなさい」と言っているのではありません！。被害者意識が悪いことだから、やめなさいと言っているのでもありません！。

人を恨むことにより、自分の心が抑圧され、内面の自由が奪われてしまうことが、耐えがたい苦しみ》だと、しぜんに自覚するところまで理解が深まれば、人はそれから開放されようと努力するものです。

被害者意識はいつも自分が被害者に成りたがり、「何々された」という発想に直ぐに陥ると同時に、「何々してやった」という発想にも直ぐに陥ります。

このような被害者意識に凝り固まっている人が救われるには、自分は被害者意識に翻弄されていて、心の自由が奪われ、被害者意識の奴隷状態にあり、それが耐えがたい苦しみ》だと自覚できるまでに理解を深めなければ成りません。

この苦しみ》は自覚できないから、存在しないのではなく、それは自覚できなくても存在していて、そ

れが自己の内面に確実に蓄積してしまい、次第に「層」のように厚くなっていきます。それを自覚できるまで層は堅く厚くなり、運命をさらに悪化させます。つまり、空中の受想行識は、それが《苦しみ》であることを自覚させようとするフィードバックのベクトルを発生させていて、空外の受想行識がそれに気付くまで、同様の運命は続いていきます。

つまり、それに気付かなければ、結果として自分がいつも被害者の立場となり、被害者意識を持つような運命を積極的に望んでしまっていることとなります。ですから、それを望む限り、それはどこまでも続きます。「いつも相手が悪く、自分はいつも被害者だ」という運命が次々でてくることに成ります。

それは、自分が望んだ運命だと言うこととなります。望むとおりになるのが「宇宙の法則」です。自ら望んだ運命を体験して、人は学ぶのです。

そして実はここに、それが自らの想念の呪縛により、自分の内面の自由性を、著しく損なう《苦しみ》であると、いつきも早く気付くようにという、隠れた守護の神霊の導きが隠されているのです。常に「救われ」は守護の神霊の強い導きによって為されるのです。

つまり、そこに運命的な困難があっても、苦しい出来事があっても、悲しみの出来事があっても、それは守護の神霊の導きなのであり、全てに意味があり、すべては肯定されていることとなります。五蘊皆空とは、まさにこのことを言います。

このように、「救われ」とは運命を、そして人生を、そして世界を全肯定することにあります。それを屁理屈や自己正当化で肯定するものではありません。

なかなかそのまま肯定はできなかつた運命的な苦しみも、ここまで来て初めて、守護の神霊の導きとして全肯定されるのですね。ですから、尚更のこと、守護の神霊への感謝と、フラクタル共鳴を発する「祈り」を、常々祈り続けることが必要なのです。

ですから、運命的困難の背後にある、本当の意味の《苦しみ》を自分の問題として「正しい苦しみの自覚」として持てるまで、原則、自らの反省力で到達しなければ成らないのです。もちろんその背景には守護の神霊の導きがあるのは当然のことです。

そして、最終的に、如何なる運命をも肯定できるようになることが、五蘊皆空の体得を意味します。

そこで、被害者意識に凝り固まって生きている人が、そのことに《苦しみ》の自覚が無いとすれば、「救われの条件」が満たされないという理由で、救われは実現しないということになります。

実現しないという意味は、今は被害者意識と一体化していて、それが自分自身とっていて、被害者の想念と密に結合し、仲良くなっているのであり、それと分かれることはその人の希望では無いからなのです。つまり、救われを望んではいないから、救われない、と言うこととなります。

自らが想念に支配されていることに「正しい苦しみの自覚」を持つことで、初めて「救われの条件」が整うことになるのです。

ですから、救われへの最終局面で人は「正しい苦しみの自覚」をもつことで、その事に守護の神霊が回答を下さり、最後の《苦しみ》の開放が実現するわけです。

想念の呪縛に気づけば、或るものは気づいただけで、「祈り」の中で消滅していきます。そして或るものはなかなか消えませんが、次第に薄くなっていくものも有ります。

しかしながら、般若波羅密多の行を深めていけば、《苦しみ》に対する感度はますます高くなるわけですから、見えてくる想念の量も質も変わっていきます。そして、いつも新しい発見が有り、発見した《苦しみ》が次々と解決されていくことが、この上ない「喜び」となります。

でも、「正しい苦しみの自覚」が無い人は、「苦しみ」を感じてはいないので、解決は望んでいないということになります。

そこにも、解決しようとする力が外から働くと、それは決して「喜び」ではなく、自分が否定されたと感じてしまい、逆に強い苦痛と感じてしまうのです。

例えば、被害者意識ということに「正しい苦しみの自覚」が持てない人に、それを解決してやろうとして「あなたは被害者意識という、想念の奴隷に成っているのだ」と真実の姿を指摘してやれば、却って、その指摘を苦痛と感じたり、暴れたりしてしまうのですね。

ですから、もちろんタイミングの良い忠告はそれはそれでとても大切ですが、基本これは自分でその事に気づいて、自らの努力で解決する以外にないのです。

この「正しい苦しみの自覚」に至るには、いつも道に叶った行為をすることではなく、言葉遣いの善し悪しの反省をすることでもありません。

行為や言葉遣いを反省して、それを改める事は、それはそれで「行」の環境を整えることになり、大変立派なことに違いありませんが、それが最も重要なことではないのですね。

最優先に努力すべきは、決して正しい言葉遣いや善行為をすることではなく、そして実は想念でもなく、それは心の姿勢を常にフラクタル共鳴に整えることなのです。

その実際の「行」としては、たとえどのような「行」の環境にあっても、常に自らの内面を見極め、想念の呪縛に気づき、その根元に向かうことで心の姿勢の「嘘」を発見できるように成っていきます。

例えば、ここで示した裁きや被害者意識の想念の呪縛に気づけば、その根元の心の姿勢に「嘘」があることが発見できます。

「ここでの嘘」とは、間違っただ心の姿勢であり、そこから発する想念は常に「自分は何でも分かっていて特別に偉い人間であり、自分は常に正しい」という「嘘」から始まって。「だから、自分はいつも高見から相手を裁き続け、何々してやったのは自分であり、悪いのはいつも相手であり、自分は常に被害者なのだ」、というふうに「嘘」がどんどん派生していくのです。

心の姿勢を整えることで、さまざまな「嘘」を発見することが出来て、そして遂に、「正しい苦しみの自覚」から、次に述べる救われを完成させるための【完全からの出発】により、いよいよ救われの最終段階に入ります。

そして、ここはもう既に「空」の領域なのです。

### ●ここに 救われを完成させるための【完全からの出発】が必要になる。

気づいた想念の呪縛はそこに「正しい苦しみの自覚」を持つことで、祈りの中で消えていきますが、「感度」が上がるにつれて、どうしても消えないものも出てきます。「感度」が上がることで、さらに小さな障害が見えてくるのではないのです。

実は大きな障害が見えてくるのです。これまでは余りに大き過ぎて見えなかつただけなのであり、次第に重大な、そして根本的な障害が見えてくるのです。次第に想念の根元にある心の姿勢の「嘘」の存在が浮き上がってくるという意味です。

つまり、「行」を深め、完全を求めていくと、自分の内面がよく見えてきて、その奥に大きな不完全さを発見することになります。そしてそこから、修行はさらに次の段階に進んでいきます。

そしてそこまで至ったときに、初めて救われを完成させるための【完全からの出発】が必要になってくるのです。

しかし、その時機が来ていない人がこれを実践しようとしても却って大げがをしますね。決して上手く

いきません。

ここで「時機が来ていない人」とはどのような人かと言えば、それは自己の内面の自由性の障害に気づいていない人であり、従ってそれを回避するための努力をしない人であり、色の立場からの誠実さを貫くという習慣が付いていない人のことを言います。色からの発想で行動できる習慣が付いてない人が【完全からの出発】を実践することは許されません。

私は「救われ」を完成させるための【完全からの出発】について、他の著書では以下のように説いています。

つまり、「空」由来の「完全」を知って、そこに自らを近づけようとする努力は、当然重要ですが、最終場面では、それが出来ない不完全さがどうしても残ります。正確には、それを不完全と判断してしまう、不完全な自分の判断が残ってしまうと言うことです。

しばしば、人は強引に自己正当化によって、完全を装います。これは落とし穴に落ちたことを意味します。多くの人がこの落とし穴に落ちています。

そこで、落とし穴に落ちないように、今までの行の延長では、最後の場面での解決は不可能であることを知って、最後は不完全を完全にしようとすることは止めて、自己正当化は徹底的に避けて、不完全を持ったまま、完全の中に入りなさい。

そうすれば、不完全は完全の一部と成り、肯定されます。…と私は説いています。

この救われの最終局面では、救われを完成させるための【完全からの出発】により、守護の神霊の大きな関与があって「空」へと導かれ、自己肯定が完了し、本当の意味で「救われ」を得たことになりま

す。そして、「救われ」を得れば、その色即是空・空即是色の心の姿勢を保ったまま、感謝し、喜び、笑い、涙を流し、そしてあるときは怒り、命の流れるままに思考し、行動するようになっていくのです。

今更、人を愛そうと努力しなくても、既に愛は心の内に溢れていて、そこには心の平安も安心も充ち満ちていることを発見するのです。

このことを般若心経には、般若波羅密多の瞑想と行によって、「無意識界」を実践し、「心無罣礙」に至って、恐怖は無くなると書いてあります。

この修行の現代版については、私は「自明行」として、他書で説いていますが、それは、それが自分に必要と思える時を待ってから、それを読むのが良いのです。

その時とは、心の「罣礙」を発見することが苦痛ではなく、喜びとなったときです。

さて、どうでしたか？。

どこまで自分のこととして理解できましたか？。

あなたは自分の「苦しみ」に気づきましたか？。

それを解決することが「喜び」であると自信を持って言えますか？。

今の自分が、いったいどれくらいの所にいるのかが理解出来ましたか？。

修行の中でも、特に**想念**の支配は強烈で、意志力でも、なかなか越えられないものが有るのです。そして、それであるからこそ、そこに神仏の導きと、**守護の神霊**の働きがあるのです。自らはどこまでも正直に、自らの「嘘」を排除しつつ、**守護の神霊**に運命の結果を委ねることこそ、行の極意です。つまり、そこに宗教の役割があるのです。

私は著書で、これをより**普遍的**に説明しました。

さて、さらに続きがあります。

**救われ**たとしても、それでこの**想念**が消えることにはなりません。

**想念**が自分から離れていくのです。

**空即是色**として、現実世界に働きかければ、再び**想念**と対峙しなければ成りませんが、そこでは**想念**は**想念**として見えています、それが自分ではないことが分かるのです。

この体験を重ねることで、働きも大きくなっていくのです。

そこまで行って、初めて人は**救われ**を実感できるのですね。

さらに、一般化して説きましょう。

### ●運命に関する【完全からの出発】で、一つ一つ、壁を飛び越えて悟りに至る。

世界中の如何なる宗教に於いても、**救われ**を得るためには、例外なくここに述べた「**正しい苦しみの自覚**」が必要なのです。そして、背後の**守護の神霊**の導きがあって、運命に関する【**完全からの出発**】により、一つ一つ壁を飛び越えることができます。殆どの、歴史ある宗教や、新興宗教でもまともな宗教であれば、そのような道が用意されています。

「何何すれば**救われる**」というような、**救われ**のための交換条件は一切ありません。もし、如何にもそこに交換条件が有るように説かれていたとしても、実際は、結局は自らの反省力で、「**正しい苦しみの自覚**」に至らなければならないのです。

既に、未来には完全な自分があって、そこから発想し、行動するというのが、【**完全からの出発**】です。究極の場面では、これが力を発揮します。

日々の行の中で、大きな障害を飛び越えるには、**色の立場**から**誠実さを貫く事**により、運命に関する【**完全からの出発**】を実践することには十分な意味があります。それはしばしば有効です。**守護の神霊**に導かれて、大きな障害を飛び越えることが出来ます。

### ●一方で、この【完全からの出発】は、原理主義に落ち込む危険性も持っている。

自己の内面の**苦しみ**からの開放のために、「**正しい苦しみの自覚**」を求めるべきなのに、それを中心に説かないで、例えば、【**完全からの出発**】のような、原理だけ中心に説く宗教は、**色の立場**に立っていない初心者にとっては、なかなか道は遠く、却って道を踏み外す危険がありますね。

**原理主義**の怖いのは、この【**完全からの出発**】のような、絶対の真理を表す言葉でさえも、自己正当化のためにこれを逆手にとってしまう輩もいるという、困った現実があるからです。

記録され、文字になった言葉は真理そのものではないと知るべきです。

独善に埋もれた悪意があれば、或いは無知に埋もれていれば、ここからは正反対の趣旨すら、強引に読み解くことが出来るということを知るべきなのです。そしてここにこそ、**原理主義**の危険性があるのです。

この危険性は、既に私の著書で述べた「**悟り・A**」の持つ危険性と同じですね。

「人間はそもそも**「空」**なのだから、既に**「空」**であるという立場から発想し、行動せよ！」というのと同じですね。これを一気に実践するには無理があります。

「**正しい苦しみの自覚**」のプロセスを飛ばしてしまって、理論だけを**原理主義**的に説いてしまうと、それは大変危険なのです。故意か否かに依らず、自己正当化のためにこれを逆手にとる輩は常にいるものです。

「**正しい苦しみの自覚**」に至らないまま、反省など必要ないと、ただただ楽をするようにと、自分の都合の良いように、形式的にだけ行ってしまう人が増えてしまうと、周りから見て、その人達の振る舞いに恐怖を感じ、社会不安が広がってしまいますから、十分気をつけなければなりません。

極端な発言を繰り返すカルト集団や、いくつかの宗教が持つ**独善**的教理というのものも、この種のものですね。イスラム**原理主義**を唱える人達は、そのような傾向がありますね。

**原理主義**は知らないうちに身の回りにも沢山有って、私たちはそれに縛られています。

**原理主義**はそのまま全てが真理なのではなく、人智によってベクトルが歪められていて、一般には「或る範囲のみで有効な、部分の真理」です。それが真理全体である保証は一切ありません。真理の一部である保証もありません。

そしてさらに、それがもし、真理の一部ではあったとしても、決して真理そのものではありません。また、文字になったものは、それは形式となってしまって、**真実**そのものでは無いのです。

そのような形式では括れないという**真実**を、著者の書いた事を例として示しましょう。

ここまでに私が述べたように「運命的な困難による**苦しみの解放**は**信仰の本質**ではなく、内面の**自由性**を追求することだけが**本質**である」と言い切ってしまうと、例外も出てくるのです。

そのような例としては、それはしかも**本質**的で重要な場面としての**信仰の姿**です。それは「衆生のために、衆生の運命的な困難による**苦しみを救おう**として、自ら**大犠牲**となる**生き方**」も存在するのです。歴史の中には、そして現代でも、そのような、**大犠牲**を成し遂げた**教祖**も居られますし、**名も無い人**であっても、そのような**生き方**をする人は実際に居られるのですね。

しかしながら、この場合も、外からはどのように見えていても、**犠牲**となる本人の**天命**としては、**犠牲**となることこそが、自己の内面の最大の**自由性**の追求なのです。

私が先に示した**本質論**では、この**生き方**には合致していないように見えてしましますが、私がそのような**生き方**に関しては、歴史の中での**金字塔**として、大きく評価こそすれ、否定するはずは無いのです。

ただし、このような**大犠牲**の**生き方**の場合は、その**教祖**を**信仰の対象**とするため、**大犠牲**だけが唯一の**真実**となりがちであり、それ故に**排他的**になったり、**独善**になったりして、**普遍性**を失いかねないので、特別の注意を要します。その意味では確かに**大犠牲**は**愛の究極**の表現であっても、**宗教**を越えた、**信仰の普遍的な動機**とはなかなか成り得ないのです。

**原理原則**から外れる例は、もっと身近にもあります。人に係わり、その人を導こうとする時には、その人の**想念**を直接受け入れますから、こちらとしては、わざわざ**「苦しみ」**を受け入れることになります。これは、自らも同じ**「苦しみ」**を受け止めて、ベクトル共鳴しながら、それを自分の**「苦しみ」**の一部として導く

うとする犠牲的な行為です。つまり、単純に原理的に、《**苦しみ**》を排除しようとするのではないということですね。

さて一般に、**原理主義**に陥れば、その原理が真理の一部であったとしても、人は、それを真理の全体と勘違いして、**独善**になりがちであり、それに命をかけて行動し、もし批判されればそれを死守しようとするから、そこから来る危険は巨大で、その弊害は大きく、簡単には修正不可能に成ります。

このことを特に重要視してください。

**原理主義**は多くの場合、**独善**のために利用されがちであり、さらに自己保身や自己の利益を追求したり、自己正当化の屁理屈をこねる時に利用されがちですから、原理で対立せずに、必ず内容という本質に立ち返りましょう。つまり、「**正しい苦しみの自覚**」という本質に戻って考えましょう。

宗教の中には、この本質以外にも様々な要素がありますが、これ以外は全て付録と思うことですね。しかし、付録といってもそこに十分な意味があるものが沢山ありますから、それは大切にしなければなりません。

ならば、どこで真実を見分けるのかと、問われれば、自らが**フラクタル共鳴**を発する「**祈り**」に、一体化して、そこから見れば、それは判断できます。

そして、より具体的には、それが**普遍的**であるか、否か、で見分けは付くのです。これからの時代は、**独善**という呪縛に基づく**原理主義**や**祈り**は、**フラクタル共鳴**に反することになります。

ですから、これからの時代において、宗教は、**独善**を廃し、**普遍性**に向かうような「**正しい苦しみの自覚**」が重視されることになります。

自分の属する宗教の祈りが、どうなのかの判断に迷うときには、祈り言葉をそのままに、そこに**普遍性**を注入すれば良いのです。元々**普遍性**を持っていたものが、人智の産物として**独善**になったのですから、それは回復できるのです。

「**祈り**」の**普遍性**の回復を願って、般若心経と共に祈れば、それは**普遍性**を回復します。

何故ここまでして、**普遍性**が重要なのかと言えば、**般若心経**にあるように、**色即是空**として、**空**に至った後は、つまり、「**救われ**」の後は、**空即是色**として、現実世界に働きかける仕事が残っているからなのです。その時に、もし**独善**があれば、その働きかけがきわめて危険なことになることは明らかです。これは現代に生きる人であれば、誰にも理解できるはずで、宇宙の経綸として、現代とはそういう時代なのです。

## ●この道は普遍的である。

そして、「**正しい苦しみの自覚**」が出来れば、後はフィードバックが自然にかかりますから、道を間違えることはありません。

常に「**正しい苦しみの自覚**」だけが重要で、どのような信仰の形でも、宗教宗派に関係なく、「**正しい苦しみの自覚**」があれば、もうその人は**救われ**に向かって真っ直ぐに進んでいるといえますね。

本質が、「**正しい苦しみの自覚**」にあることをしっかりと理解していれば、もし本質から外れて、運命的な困難を救うことに重点が置かれていたとしても、運命的な困難を回避しようとするだけの信仰の姿であっても、すべてプロセスとして肯定できるのです。つまり、**独善**にならずに済むのです。

さて、本質を歩む人達の中には、**救われ**の最終局面にあり、もう少しで、**救われ**の自覚だけを持ってばよいところまで来ている人も沢山居ますね。特に現代においては、**独善的**であることに「**正しい苦しみの自覚**」を持つことが正常ですね。

自らの所属する宗教で救われたという人は、自ら「正しい苦しみの自覚」にまで至り、最後にそこでとかれる人格神によって、救われを得て、それを自覚させてもらったということなのです。

この人はその人格神に心底からの感謝が有るのは当然ですが、救われと同時に、《宇宙の理念》を体得したことになり、既に「空」に至っているし、宗教宗派を越えている筈です。

こうして宗教宗派を越えたときこそ、初めてその人は救われたといえるのであり、普遍性を体得した自覚を得たことが、救われの証拠と言えるでしょう。

救われた人に、宗教の独善は無いのです。運命的困難からの開放過程で学んだ独善的理論はここで完全に破棄されるのです。

このように「正しい苦しみの自覚」を経由した本物の救われには、当然、独善に対する「正しい苦しみの自覚」がある筈ですから、必ず普遍性を得ることができますね。私の大好きな普遍性です。

さて、世の中を振り返れば、「正しい苦しみの自覚」を持ってないことが常に問題で、持ってないことが迷いなのです。それが救われていない状態なのです。

### ●常に初心に戻り、人間の抱える「負の側面」を正しく自覚せよ。

知るべきは、人間とは救われがたい存在であり、人間の自由性を損なう障害という、大きな、「負の側面」を抱えて生きているという、この動かしがたい実態です。

そのことを自らの人生を通して痛いほど知らなければ、「正しい苦しみの自覚」には至らないし、「救われの条件」は満たされないのです。

「人間は、このような「負の側面」という、大きな荷物を抱えて、生きている」のです。と言っても、それは普通の人考える荷物ではありません。ここでいう荷物とは、人間が内面に抱える「嘘」ということと、同じことです。

誰もが、「人間である限り、苦しみを持っているのは当然だ」、「人間とは皆、運命的な困難やそれに伴う苦しみを抱えて生きている」、と言うでしょうが、ここでの「痛み」とはそのことを言うものではありません。

実は、これを知ることが宗教を知ることでもあるのです。

そしてこれを知ることが、全ての宗教にとっての、画竜点睛となるのです。

さあ皆さん、ここで問題をさらに掘り下げてみましょう。

人間の「負の側面」って、扱ってみるとどうしようもないところがありますよね。皆さん、それが自覚できていますか？。

それがあの人のことではなく、自分の事としてそう思っていますか？。

もし、「そうは思えない」とするなら、これはもう、重傷患者です。人生を最初からやり直すつもりで、謙虚に道を歩んで下さい。

想念の奴隷状況と書きましたが、そのことを自分に当てはめてみて下さい。そのことに気づいて下さい。

### ●全体の救われは、近代合理主義の延長の上には無い。

さて、呪縛は自己の内側からの想念によるだけではなく、外側から来る受念によるものも有ります。



想念と受念は密接に絡み合っているので、明確に分離することは不可能ですが、受念の呪縛とは、大まかには後天的なものであり、肉体に付随する空外の受想行識の機能により、人間の思考機能が外側から支配されることによるものです。そして、それが基と成り、様々な文化的呪縛が産み出されています。

常識というものが作った大衆の呪縛もあるし、マスコミが作った呪縛もあるし、宗教が作った原理主義的な呪縛もあるし、集団が作り上げた呪縛もあるし、人間は様々な呪縛にがんじがらめになって生きていて、それを知らずに居るのです。

また、多少は気付いていても、その呪縛の中にいる方が心地よいと感じてしまうのです。

受念の呪縛は想念の呪縛よりも結合度合いは弱く、想念の呪縛を見抜く人であれば、これは比較的簡単に切り離しが出来ます。おそらくこれらの大半は近代合理主義に基づくモノであり、そこに焦点を絞れば、かなりの呪縛は解放できるはずですが、デカルト以来の近代合理主義は個の論理を単純化して整理したことで、人類への大きな貢献がありますが、万能ではありません。

今後は、色と色とを分離して、受想行識と受想行識を分離して、新たに整理し直さなければ、普遍的な真理には成りません。

人類の救われとしての、世界の恒久平和にとっては、いずれ、受念の呪縛からの解放が重要なテーマになりますが、ここではそのような呪縛の存在のみを示して、これ以上の議論は近代合理主義との兼ね合いになりますので、別の機会に述べたいと思っています。

人類の救われのためには全体の救われのための理論が必要になります。もちろん、「全体の救われの理論」と「個の救われの理論」とが、互いに矛盾したり、本質的に対立したりすることは有り得ないのですが、実践的には矛盾に見えたり対立に見えたりすることはしばしば発生します。

例えば、近代合理主義に基づいて、「個人の命は地球より重い」といえば、それは個と全体の間の、大いなる矛盾に見えてしまいます。

その時に、全体と個を調和する理論の中心となるのが空の理論であり、そして特に、独善を排除する普遍性の回復が必須となります。

そこまで到達して初めて、人類は想念と受念の呪縛から開放されて、人類社会に普遍性が回復され、世界の恒久平和への道筋が示されることとなります。

もし、普遍性が回復されずに、一部にでも独善が残れば、そこが人類のガンとなり、最後は切除されることとなります。ですから、自らに、或いは自らの組織に、徹底して普遍性を回復しておくことが求められるのです。

この人類の救われの場面においてこそ、般若心経が大きな力を発揮することになります。それがこの現代から未来へと続く世界なのです。

●既に呪縛されているという自分自身の実態を知れ。

ここで想念の呪縛にしる、受念の呪縛にせよ、呪縛というやっかいなものを、何となくは見えてきたとしても、多くの方は、今はまだまだ、その苦しみ》を自覚できていないのですね。

否、その前の、想念の奴隷状況に気づいていない段階なのです。

「私は、想念に呪縛されてはいない」という人がいたら、それはもう絶望的な状況なのです。

ですから、私たちは、もう既に呪縛されているという前提で事に当たらなければならないのです。世界は呪縛の中で動いているのです。

そう理解すれば、呪縛を発見できるのです。つまり、そう理解すれば五蘊皆空の立場から考える事ができるのです。

ですから、常に問題は、既に呪縛されている現実を逃げずに受け入れて、そこに「正しい苦しみの自覚」をどのようにして持つかと言うことなのです。

そのためには、全ては守護の神霊の導きとして、救われに導かれるのですから、守護の神霊への感謝をいつきも忘れること無く、生きていくことが大切です。

## ●空への帰還。

私が今ここで、いくら口角泡を飛ばして、口を酸っぱくして、このように言っても、自らが想念の奴隷状態にあることと、そのことに「正しい苦しみの自覚」を持つことはなかなか困難なのです。

この人間の持つ「負の側面」の自覚と、「救われの条件」である「正しい苦しみの自覚」を知り、それを理解できる人はきわめて少ないのですね。

人生の体験を積み、祈りを蓄積し、守護の神霊への感謝を重ねて行くと、ある時期にそれが分かる時がくるのです。その時が来なければ、これはなかなか分からないのですね。

しかし、「自分はまだ分かっていない」ということを分かれば、それはわかっているうちにはいるのですから、先ずは、それを目指してください。そしてその自覚を持って「無意識界」の行をすれば良いのです。

さて、あなたは、広義の「救われ」に入っていますか？。

それとも既に救われていますか？。

それともまだ救われてはいませんか？。

「自分だけは特別だ」と思いたい、「自分への期待値」という誘惑を徹底的に排除して、自らの内面を、片寄らずに正確に見ようとすれば、それは分かります。

今どの段階にしようとも、自分の立ち位置さえ正しく把握することができれば、それが出発点として確立して、その時点からフラクタル共鳴状態に入ります。

いつも背伸びをしていて、期待値のみを信じて、自らの立ち位置を正しく把握しようとしなければ、フラクタル共鳴には至らずに、まだまだ迷いは続きます。つまりここでは今すぐ悟ることを求められているのではなく、自らの正しい立ち位置を知ることであり、それによって立場は確立し、フラクタル共鳴に至るのです。この認識はとても重要です。

つまり「自分は悟っている」と勘違いしている人はその期待とは裏腹に、フラクタル共鳴には至らないということになります。

ですから、今悟っていなくても、救われていなくても、この自分の出発点さえ正しく知れば、あなたの立場は確立され、フラクタル共鳴に至り、救われの軌道に乗ることができるのです。そして後は、用意された軌道の上を守護の神霊に導かれて、真っ直ぐに進むのみです。

世の中には、熱心に宗教をやっているも、この「罣礙」、つまり私が言うところの自己の内面の自由性の障害からの開放に、全く関心が無い人が沢山居ます。

関心が無いと言うことは、その人はまだ空に帰還したくないと思っている人であるということになります。空への帰還が近づいた人は、私の言う「罣礙」に大きな関心を示し、直ちに帰還の準備を始めることとなります。

ですから帰還するか、しないかは、それは自分自身の選択ということになるのですね。

そのような帰還を求める人は人類の中でも極々限られた人達です。その人達の使命は般若心経

の最後に はっきりと指示されています。それは即ち、般若波羅密多の修行をして色即是空にいたり、そして空即是色の立場から、普遍性に満ちた祈りにより、フラクタル共鳴の強力な場を生み出し、その中で互いに連携し、共に世界の恒久平和実現のために働きつつ、空への帰還を成就することになります。

今日は、ここまでです。

※この原稿は、【[献文舎HP](#)】からダウンロード出来ます。  
原稿はしばしば更新されます。